

# 『 禅のころ - 曹洞宗 - 』

## 彼岸

平成29年3月第3週放送

春の彼岸の季節となりました。春と秋の彼岸には多くの皆さんがお墓参りをされます。お墓参りをすることが彼岸の意味だと思われている方もいらっしゃるのではないのでしょうか。

「彼岸」は、インドの古い言語であるサンスクリット語の“パーラミタ”に由来し、“向こう岸に<sup>いた</sup>至る”という意味で“彼の岸”<sup>か きし</sup>と書きます。川の兩岸に<sup>たと</sup>喩えて、迷いと苦しみの世界である私たちが生きるこちら側の岸を“此の岸”<sup>こ しがん</sup>として、そこからおさとりの世界であるあちら側の岸“彼岸”<sup>ひがん わた</sup>に渡るといふ仏教の大切な教えをあらわしています。

私たちが生きている、こちら側の岸「此岸」<sup>しがん</sup>ではさまざまな思い通りにならないことがあります。一つ悩みが解決してもすぐ次の悩み…。年をとり、病気になり、いずれは<sup>な</sup>亡くなる。途切れることのない自らの欲望に悩み苦しみながら生きている…。

対する、川を渡ったあちら側の岸「彼岸」は、そのような悩みや苦しみの無い、欲望が収まったところで、おさとりをひらかれたお釈迦さまの教えに生きる世界です。

お釈迦さまに<sup>あこが</sup>憧れ、そのようになることをあらためて願い、思いをはせることで続いてきたのが「お彼岸の季節」だと考えることもできるでしょう。

日頃の生活の中では、他人を<sup>けお</sup>蹴落とすようなことをしてしまうときや、嘘をついてしまうこともあるかもしれません。

しかし、春と秋のお彼岸の季節に仏様に手を合わせ、仏様の弟子としての御名前である「戒名」のついた亡き方々に手を合わせて、そのような<sup>きようがい</sup>境涯、「彼岸」<sup>いた</sup>に到ることを<sup>ちか</sup>誓い願うということは自らの大切な行いとなります。

道元<sup>どうげん</sup>禅師は「彼岸に<sup>いた</sup>到る」から「彼岸が到る」とお示しです。

故人に手を合わせて<sup>こころ</sup>心静かに祈りをささげ、仏の教えに触れて自らを仏の教えに照らしてゆく…。そこにはすでに「彼岸」があらわれているのです。

故人のために一心に手を合わせるそこに「彼岸」があらわれますように、お墓参りはそのような気持ちで行いたいものです。

— 終 —